

IV 調査結果の分析

ハンセン病問題に関わる意識（2011年調査結果との比較）

近畿大学人権問題研究所 教授 奥田 均

[1] ハンセン病問題に関する認識

(1) ハンセン病の認知と経路

図1は、「あなたは、ハンセン病がどのような病気か知っていますか」（問1）に対する回答結果を前回調査（2011年調査）と比較したものである。「知っている」および「少しは知っている」の合計は41.7%で、前回の46.8%よりやや減じている。

表1は、問1で「知っている」および「少しは知っている」とした人に対して、「ハンセン病問題をはじめて知った経路を尋ねた（問1付問1）結果である。「学校の授業で教わった」が60.0%と最も高い。また、「テレビや映画、新聞などマスコミ報道で知った」も21.6%あり、若い世代に対するメディアの役割が大きいことがうかがえる。

図1 ハンセン病についての認知

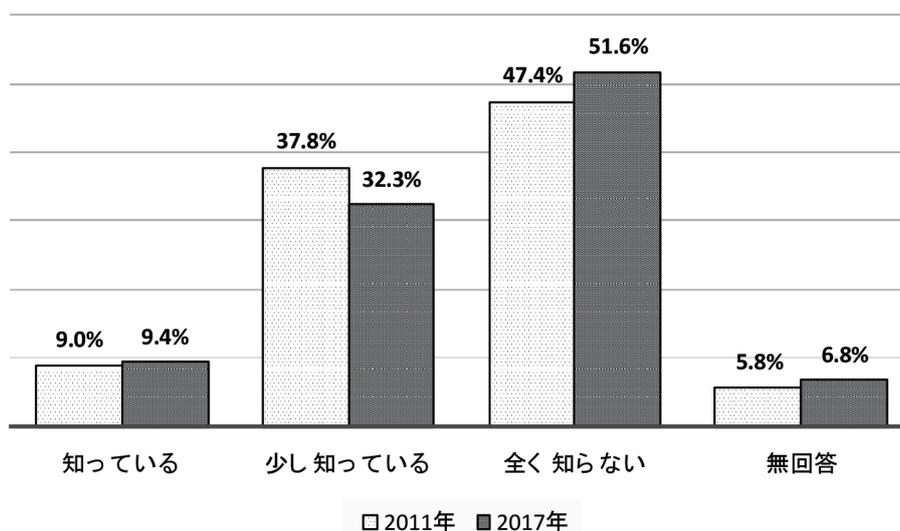


表1 認知経路

	2017年 (%)	2011年 (%)
家族から聞いた	2.6%	4.0%
友達や同僚から聞いた	0.6%	0.2%
学校の授業で教わった	60.0%	56.3%
市民対象の研修会・講座で知った	0.5%	0.6%
テレビや映画、新聞などマスコミ報道で知った	21.6%	23.2%
本や雑誌で知った	4.5%	7.7%
インターネットで知った	4.2%	2.1%
行政のパンフレットや広報誌・広報紙で知った	0.5%	0.2%
その他	2.2%	2.5%
無回答	3.4%	3.3%

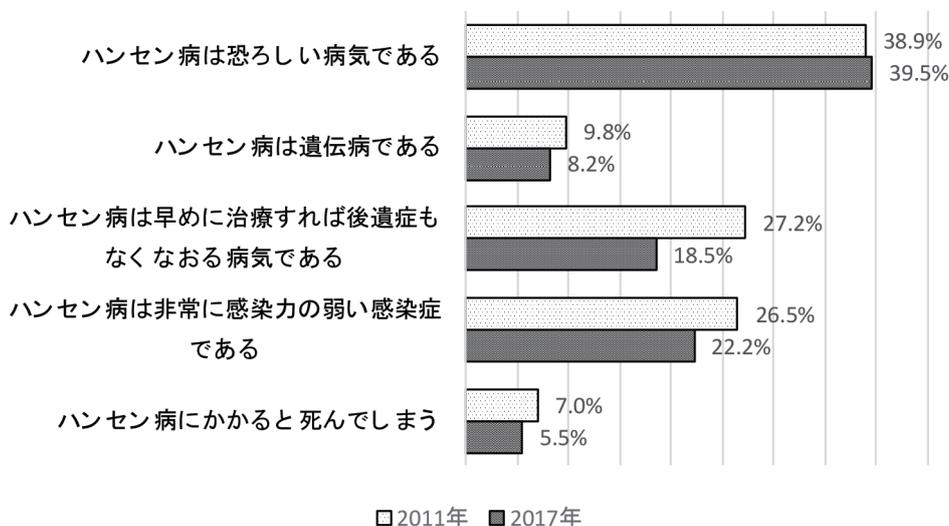
(2) ハンセン病問題に関する知識

【医学的知識】

図 2 は、ハンセン病に関する医学的知識を問うている問 2 の各項目で、「そう思う」とした人の割合を 2011 年調査と比較したものである。

「ハンセン病は早めに治療すれば後遺症もなくなおる病気である」とした人が 18.5%、「ハンセン病は非常に感染力の弱い感染症である」とした人が 22.2%と、前回調査より正しい知識の割合はいずれも減少している。こうした中で、「ハンセン病は恐ろしい病気である」とのイメージを持っている人が、39.5%と前回同様高い数値となっている。

図 2 ハンセン病に関する医学的知識

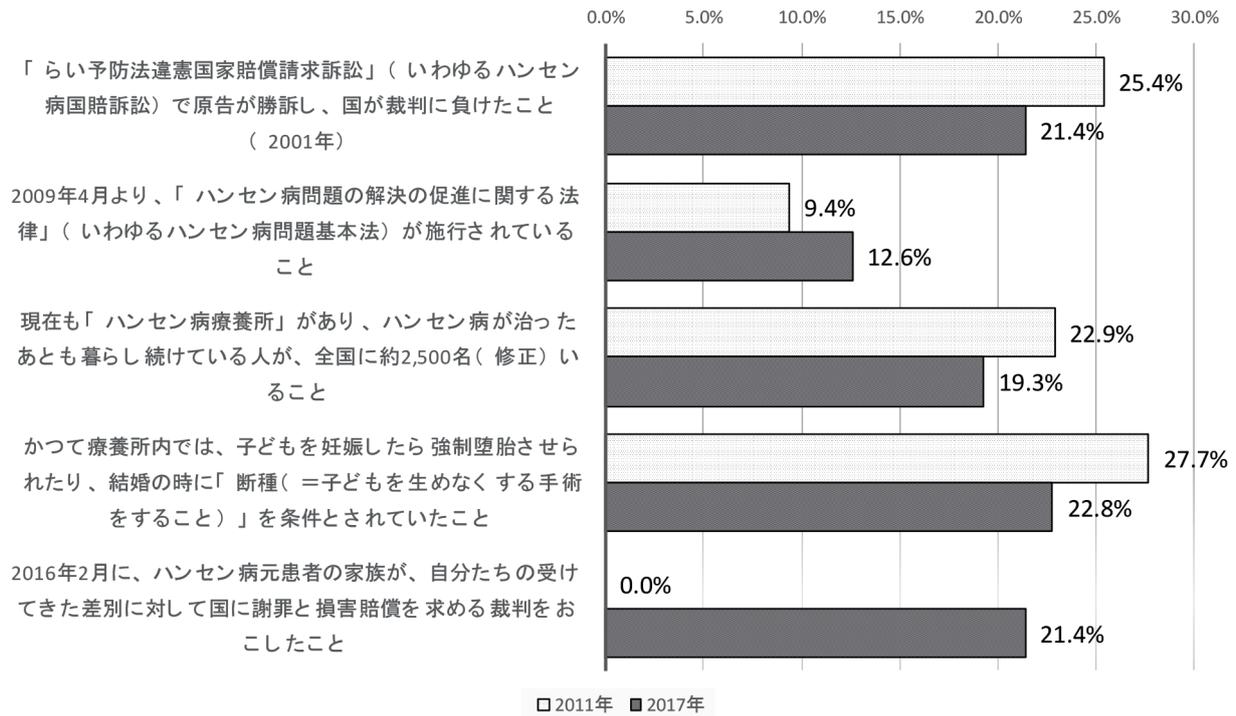


【社会的知識】

図 3 は、ハンセン病問題に関する社会的取り組みに関する知識を問うている問 3 の各項目で、「知っている」とした人の割合を 2011 年調査と比較したものである。

今日の取り組みの原点となった「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」（いわゆるハンセン病国賠訴訟）についての認知が 21.4%にとどまっている。しかし 2016 年 2 月に、ハンセン病元患者の家族が、自分たちの受けてきた差別に対して国に謝罪と損害賠償を求める裁判をおこしたいわゆる「家族訴訟」についても 21.4%の人が知っていると回答している。最近の出来事であり、メディアが取り上げたことの影響だと推測される。現在もなお療養所で暮らす回復者の人がいることを知っている人は 19.3%にとどまっている。

図3 ハンセン病問題に関する社会的知識



(3) 今日のハンセン病問題の状況に関する認識

図4は、「あなたは今でも、ハンセン病回復者やその家族に対する偏見や差別があると思いますか」(問6)に対する回答結果である。「わからない」が46.0%を占めており、差別の現実に対する認識が前回調査に比べて薄れてきている。

図4 ハンセン病回復者やその家族に対する偏見や差別の認識

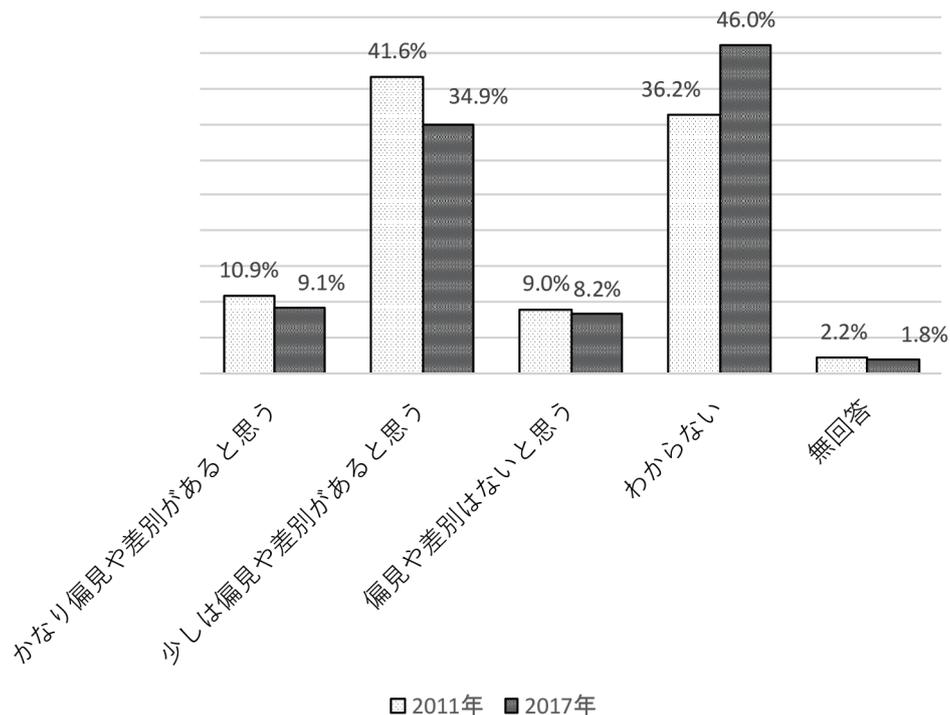
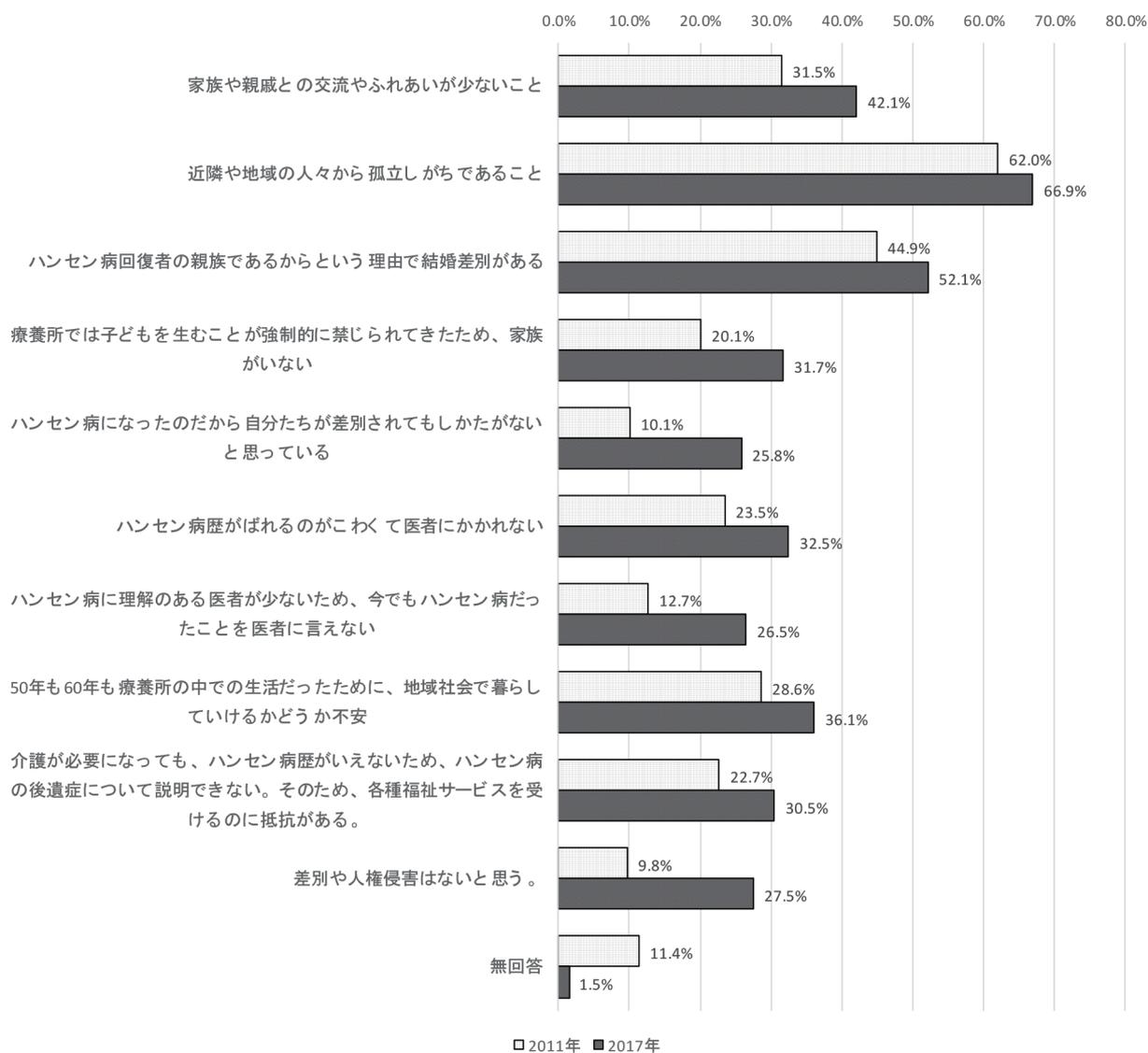


図5は、ハンセン病回復者やその家族に対してどのような差別・人権侵害があるのかについての認識を問うている問7の結果である。

前回に比べて10ポイント以上高くなっているのは、「家族や親戚との交流やふれあいが少ないこと」(31.5%→42.1%)、「養所では子どもを生むことが強制的に禁じられてきたため、家族がいない」(20.1%→31.7%)、「ハンセン病になったのだから自分たちが差別されてもしかたがないと思っている」(10.1%→25.8%)、「ハンセン病に理解のある医者が少ないため、今でもハンセン病だったことを医者に言えない」(12.7%→26.5%)など、具体的な差別・人権侵害についての理解は深まっている。

他方、「差別や人権侵害はないと思う」も9.8%から27.5%へと増加しており、認識の格差は大きくなっている。

図5 ハンセン病回復者やその家族に対する差別・人権侵害の認識



[2] ハンセン病問題に関する学習経験

表 2 は、これまでにハンセン病問題を学習した経験を質問している問 4 の結果である。調査対象者が 1 回生であることを踏まえれば、「大学で受けた」との回答結果は人権関係講座の講義との関連が強いと考えられる。いずれにせよ、「受けたことはない」が前回の 43.0%から 37.2%へと減じており、学校教育現場でハンセン病問題の学習が広がっていることがうかがえる。

表 2 ハンセン病問題の学習経験

	2017 年	2011 年
1. 小学校で受けた	8.2%	13.1%
2. 中学校で受けた	13.5%	
3. 高校で受けた	11.8%	9.6%
4. 大学で受けた	13.4%	19.1%
5. 一般市民対象の講座などで受けた	0.1%	0.4%
6. はっきり覚えていない	29.0%	22.2%
7. 受けたことはない	37.2%	43.0%
8. 無回答	1.7%	2.2%

[3] ハンセン病問題にかかわる差別のとらえ方

(1) ホテルによる宿泊拒否事件

表 3 は、2003 年熊本県で発生したハンセン病療養所入所者に対する温泉ホテルによる宿泊拒否事件に対する考え方を問うた問 8 の回答結果である。「ホテル側の対応は差別であり許されない」との認識が 46.5%にとどまっている。前回調査との変化は見られない。

表 3 ハンセン病回復者に対する温泉宿泊拒否についての認識

	2017 年	2011 年
ホテル側の対応は差別であり許されない	46.5%	46.6%
「他の宿泊客への迷惑になる」との理由は一理あり、ホテル側の対応は認められる	11.6%	9.0%
どちらともいえない	38.0%	36.7%
無回答	3.9%	7.5%

(2) 強制隔離

表 4 は、ハンセン病患者を「療養所」に隔離したことに対する考え方を問うた問 9 の回答結果である。「やむを得ない措置であった」として隔離政策を肯定する意見が「そう思う」5.2%、「どちらかと言えばそう思う」21.8%あり、その合計は 27.0%であった。

「療養所のほうが幸せである」との理由で「療養所」に隔離したことを肯定する意見が「そう思う」3.7%、「どちらかと言えばそう思う」8.8%あり、その合計は 12.5%であった。

「療養所」への隔離をゆるされないことであるとの考えを肯定する意見が「そう思う」26.9%、「どちらかと言えばそう思う」24.0%あり、その合計は 50.9%であった。

いずれにおいても 2011 年調査の結果との顕著な変化は認められない。

表 4 ハンセン病患者の強制隔離に対する意見

	ハンセン病患者を「療養所」に強制的に隔離してきたことはやむを得ない措置であった		ハンセン病患者にとっては、「療養所」の中では医療や福祉を受けることのほうが幸せである		ハンセン病患者の自由を拘束することはいかなる理由があっても許されないことである	
	2017年	2011年	2017年	2011年	2017年	2011年
そう思う	5.2%	5.4%	3.7%	2.8%	26.9%	29.0%
どちらかと言えばそう思う	21.8%	17.4%	8.8%	7.9%	24.0%	26.8%
どちらともいえない	39.2%	37.1%	50.7%	48.3%	34.8%	28.0%
どちらかと言えばそう思わない	14.0%	18.2%	13.8%	16.6%	4.6%	6.1%
そう思わない	16.9%	18.6%	20.0%	20.9%	6.8%	6.5%
無回答	2.9%	3.4%	3.0%	3.5%	3.0%	3.6%

(3) 無らい県運動

表 5 は、無らい県運動の第一線を市民が担ったことに対する考え方を問うた問 11 の回答結果である。一部項目が異なっており単純に 2011 年調査と比較できないが、「行政から言われたのだから仕方なかったのだと思う」が 9.3%から 21.8%へ、また「近所や地域にハンセン病の人がいると病気がうつることをおそれたのだと思う」が 31.2%から 52.0%へとそれぞれ増加している。

2017 年調査の新しい項目である「ハンセン病患者は療養所に入ったほうがむしろ幸せだと考えたからだと思う」が 7.1%であった。表 4 では、「療養所のほうが幸せである」との理由で「療養所」に隔離したことを肯定する意見が「そう思う」3.7%、「どちらかと言えばそう思う」8.8%あり、その合計は 12.5%あったが、ともに共通する考え方であり、「当事者のため」という発想で「強制隔離」や「無らい県運動」を評価している層が一定存在していることに注目したい。

表 5 「無らい県運動」に市民が協力したことについての意見

	2017年	2011年
行政から言われたのだから仕方なかったのだと思う	21.8%	9.3%
ハンセン病患者は療養所に入ったほうがむしろ幸せだと考えたからだと思う	7.1%	—
協力しないと、自分や家族がハンセン病に関わっていると疑われるのがこわくて協力せざるを得なかったのだと思う	—	16.8%
協力しないと、自分や自分の家族が地域社会から排除されると心配したからだと思う	30.8%	29.7%
近所や地域にハンセン病の人がいると病気がうつることをおそれたからだと思う	52.0%	31.2%
その他	3.2%	4.3%
無回答	8.1%	8.6%

[4] ハンセン病回復者への抵抗感

(1) 社会的抵抗感

表 6 は、ハンセン病回復者が自分の身近なところに存在することに対する抵抗感を問うた問 10 の回答結果である。

「とても抵抗を感じる」と「やや抵抗を感じる」をあわせた「抵抗を感じる」割合は、「同じ職場で働くとき」が 10.6%、「近所に住むこと」が 7.2%、「ハンセン病回復者である人の子どもや孫にあたる人と結婚すること」が 21.2%であった。2011 年調査と大きな変化は見られなかった。

表 6 ハンセン病回復者に対する社会抵抗感

	同じ職場で働くこと		近所に住むこと		ハンセン病回復者である人の子どもや孫にあたる人と結婚すること	
	2017 年	2011 年	2017 年	2011 年	2017 年	2011 年
とても抵抗を感じる	1.4%	1.2%	1.2%	0.9%	5.6%	5.0%
やや抵抗とを感じる	9.2%	11.5%	6.0%	6.5%	15.6%	18.6%
あまり抵抗を感じない	27.8%	33.8%	28.4%	34.8%	20.3%	23.3%
全く抵抗を感じない	22.0%	20.9%	27.6%	28.9%	16.0%	15.6%
わからない	37.4%	29.8%	34.4%	26.0%	40.1%	34.6%
無回答	2.3%	2.9%	2.3%	2.9%	2.4%	3.0%

(2) 身体的抵抗感

表 7 は、ハンセン病回復者との身体的な関わりに対する抵抗感を問うた問 10 の回答結果である。

「とても抵抗を感じる」と「やや抵抗を感じる」をあわせた「抵抗を感じる」割合は、「一緒に食事をする事」が 15.1%、「手をつないだり身体にふれること」が 26.7%、「一緒に入浴すること」が 33.3%であった。2011 年調査と大きな変化は見られなかった。

表 7 ハンセン病回復者に対する身体的抵抗感

	一緒に食事をする事		手をつないだり身体にふれること		一緒に入浴すること	
	2017 年	2011 年	2017 年	2011 年	2017 年	2011 年
とても抵抗を感じる	3.1%	2.3%	6.5%	4.8%	11.8%	7.8%
やや抵抗とを感じる	12.0%	13.2%	20.2%	22.7%	21.5%	27.5%
あまり抵抗を感じない	25.4%	33.2%	19.3%	25.1%	15.2%	8.3%
全く抵抗を感じない	20.7%	18.9%	12.5%	12.3%	9.0%	9.8%
わからない	36.4%	29.5%	39.1%	32.1%	40.1%	33.6%
無回答	2.4%	3.0%	2.4%	3.0%	2.4%	3.0%